

【研究名】：バルプロ酸併用の有無による神経膠腫治療時の副作用発現状況調査

【目的】

神経膠腫（グリオーマ）は脳に発生する悪性腫瘍で、原発性脳腫瘍の約30%を占めています。神経膠腫はWHOの組織学的悪性度分類によってグレード1から4までの4種類に分けられ、そのうちグレード4の膠芽腫（グリオブラストーマ）がもっとも悪性度が高いのですが、グレード2以上の神経膠腫は、手術だけでは再発することが多く手術後にアルキル化剤であるテモゾロミドと放射線治療との併用療法が行われています。

バルプロ酸は抗てんかん薬、あるいは躁病等の気分障害の治療薬として広く用いられている薬物ですが、近年、グリオブラストーマの治療時に併用すると延命効果が認められたとの報告がされました。一方、バルプロ酸は放射線によるDNAの損傷を改善するとの報告もあります。すなわち、神経膠腫治療時にバルプロ酸を併用すると、抗腫瘍効果とともに放射線による副作用の軽減も期待されると考えられます。そこで、本研究ではバルプロ酸の併用による神経膠腫治療時の副作用軽減効果を検討するため、バルプロ酸併用の有無による神経膠腫治療時の副作用発現状況を調査します。

【研究意義】

神経膠腫治療時にバルプロ酸の併用することにより、延命効果とともに放射線による副作用発現の予防・軽減を図れることが期待されます。

【研究内容】

神経膠腫の治療を受けた患者さんを対象に、年齢、体重、腎機能検査値、薬歴などを調査します。

【研究期間】

2013年8月～2015年7月の2年間を予定しています。

【患者さんの個人情報の管理について】

厚生労働省「疫学研究に関する倫理指針」に基づいて患者さんのプライバシーを守るよう努めています。結果の発表や出版に際しては個人が特定できるような情報は掲載しませんので、患者さんの不利益となることはありません。

【研究実施体制】

愛媛大学医学部附属病院 薬剤部

教授 荒木 博陽

講師 田中 亮裕

薬剤師 田中 守

薬剤師 渡邊 真一

薬剤師 桑原 由衣

【研究成果】

バルプロ酸併用群は非併用群と比較して、肝機能悪化、異常な血球数減少等の副作用を生じることなく、脱毛発現までの線量及び期間を有意に延長する可能性が示唆されました。